事例９　別室登校で、かかわってもらう存在から、かかわる存在に成長したＩ男（中学２年生）

欠席等の様子

小５　67日　２学期以降は、放課後に登校した。

小６　115日　２学期以降は、ことばの教室に登校した。

１学期８日
２学期９日　保健室・相談室登校
３学期10日

中１　27日　１学期３日　相談室登校
２学期０日　〃

中２　３日

（11月末現在　教室登校１日（始業式））

学習の様子

〔言語〕特定音が不明瞭で、基本的な漢字が未習得である。不的確な言葉遣い、話題の偏り、漢字の点画の間違いも多い。

〔図形・数〕図形作図、合同・対称の理解が困難である。日常生活に必要な量の推測することや、公式を利用することが難しい。

〔実技〕リコーダーの指使い、はさみやカッターナイフなどの操作がかなりぎこちない。絵の表現が苦手である。

性格や行動の様子・エピソードなど

○　父母が不和な状況のもとで、二人目の男の子として生まれた。
○　父親の転勤で短期間にたびたび転居した。幼稚園も次々に変わる。
○　幼稚園年長時に父親が別居した。
○　（幼児期）母親の立ち話が１時間になっても、片時も離れずに側にいる。
○　（同）決めた足から踏み出さないと外出できない。汚れた手を執拗に洗う。
○　（小１）入学当初強く緊張する。給食にこだわり、登校をしぶる。
○　（同）構音障害があり、ことばの教室で指導を受ける。
○　（小２）苦手な作業等を強いると「学校を辞める」と荷物をまとめて帰ろうとする。
○　（小３）自分の思いを出せないため仲間に入れない。２学期ころから攻撃的になる。
○　（小５）「宿題ができていないから学校へ行かない」と言って欠席することがあった。

生徒の理解

不安定な幼児期を過ごしたことなどによる社会性の未熟さが不登校の背景にあると考えられる。構音障害の既往歴もあり、自分の考えや思いを伝える表現が乏しく、集団適応に配慮を必要とする。そのため学習にも遅れがみられる。

保護者は、不登校の原因はいじめであると考えており、学校の対応に不信感をもっている。このことがＩ男の登校しぶりを助長していることにも留意が必要である。

援助・指導の方針

１　円滑な対人関係をもてるように受容的態度を示しながら指導する。
（相談室登校での人間関係を糸口とした自己存在感の育成）

２　好きな教科または嫌いな教科に応じた適切な方法や形態で、学習の援助・指導を行う。
（自己有能感を生かす工夫）

３　家庭との連携により信頼関係の修復を図る。（母親の心の安定）

援助・指導例と経過	主な担当者　教育相談部、養護教諭
○入学式前日の家庭訪問	・養護教諭･相談担当教諭が入学式の参加方法について､母親とＩ男とに面談を行う。→入学式終了後に登校し、教室には入らず、廊下から担任の話を聞いた。
○保健室登校	・翌日から保健室へ登校した。教科の学習活動はほとんどできなかった。気に入らないと「帰る」を連発した。 ・養護教諭だけでなく相談担当や担任へ、教師との人間関係を広げた。→３校時目登校のリズムが確立した。
○相談室登校	・保健室登校から相談室登校に変え、同室の同学年男子１名と出会った。→かかわってもらうだけの存在から対等にぶつかり合う関係へ変化した。
不安定な関係	・毎日のように喧嘩する。ひどく攻撃的になり不安定になった。→受容的態度で接し、気分を変えられるように、Ｉ男が安定して取り組める活動を中心に指導を行った。
安定した関係	・生徒１名が増えたが、その関係は安定し、Ｉ男も小集団への適応を見せる。わがままや不適応行動に対して同世代の仲間から注意や指摘を受け、自分をコントロールする力が少しずつ育つ。 ・(相談室でも)教科担任制にしたので、多様な教師と人間関係が拡大した。 ・漢字の読みでは一目置かれる力を生かし､「小先生」としてさらに意欲づけた。→集団での学習を苦手にしていたが克服させる。（自己有能感の活用）
○適応指導教室への参加	・適応指導教室（社会見学、スキー教室、陶芸教室、料理教室等）に参加することで、楽しさを共有する経験をもつ。（他機関との連携）
○教室登校	・相談室の仲間が教室の授業を受けに行く姿を見たり、その経験を交流したりする中で、「僕も行ってみようかな」と心を動かし始める。→文化祭・体育祭に仲間と一緒に参加した。（４年ぶりの行事参加）
母親の感動	・行事参加ができたことに母親は感激し、次第に学校不信が払拭され、相談室登校生徒の保護者会にも初めて参加した。（学校への信頼感）
○かかわる存在へ	・相談室内の女子の関係がもつれ、ひとりぼっちになった生徒の相談役として、その子の「居場所」として活躍することもあった。→かかわってもらうだけの存在からかかわる存在に成長した。

変化と課題

１　変化

徐々に人間関係を広げ、相談室で、孤立することから集団の中に入っていくことができた。その中でも、かかわってもらうだけの存在からかかわる存在に成長した。

相談室仲間のかかわりが、素直に受け入れられ、教室登校に向けた活動が少しずつできるようになってきた。

２　課題

○　所属学級に、Ｉ男を受け入れ、居場所や存在感のある雰囲気をつくる。

○　校内連携（相談担当と担任）を強化し、保護者との連携を深める。

考　察

小学校との適切な連携と、その情報を活かした取組(入学式前の家庭訪問)で個に応じた配慮が機能している。保健室から相談室へ、また相談室内でも徐々に集団適応の機会が多様に設定され、次第に対人関係が広がった事例である。

かかわってもらう存在からかかわる存在へと成長できたことは、Ｉ男の興味・関心に基づき、自己有能感を大切にする活動を中心とした指導が行われたからであろう。

Ｉ男は今　苦手な作業的な学習にも取り組めるようになり、一部の教科については教室で授業を受けている。